

**「朱子学」**: 宋学・道学とも言う。宋代の儒者(進士であり、高級官僚でもある)の儒学テキストの解釈を朱子が集大成した学問。網羅的・精密。

**「陸王学」「陽明学」**: 朱子の同時代人でライバルである陸象山の論(解釈)を、明代の王陽明がリバイバルさせて発展させた学問。陸象山からの流れを重視すると陸王学、明代に大流行した王陽明とそのフォロワーたちの論を特に指して、陽明学。心の純化に集中すべきことを説いたので陸王心学とも呼ばれる。

## 藤原惺窩: 日本朱子学の祖

司馬遼太郎によってひどく悪く書かれている。中国朝鮮かぶれの朱子学者で、武家が支配する日本の社会を憎悪して、王道政治を行う明・朝鮮にいつそ日本が平定されることを願う者として書かれた(惺窩の言葉は朝鮮人の姜沆の日記に記録されたものであるが)。その弟子の林羅山は、とくに近代日本において評判が悪い。徳川政権にこびへつらう、曲学阿世の御用学者。キリシタンとの論争で地球球体説と地動説を否定して古代の天円地方説と天動説を主張する、非科学的な鎖国時代の一象徴。

### 《藤原惺窩の興味深さ》

#### ①安土桃山時代の有名な武将たちとの関係。

秀吉、秀次、家康、三成、島津家、小早川秀秋、直江兼続。マイナー大名の赤松広道は、惺窩の門人であった。

#### ②室町時代～戦国安土桃山時代の禅僧の役割が見えてくる。

- 1 論理的な思考と作文能力で、法度の起草を行う。
- 2 中国の古典・歴史故事の知識を用いて、後継ぎの教育係、成人して政治顧問になる。
- 3 漢文漢詩の能力を用いて、明・朝鮮の外交を担当する。

#### ③安土桃山時代の明・朝鮮との国際情勢との関わり。惺窩は多くの明人・朝鮮人と直接交流した学者であった。

#### ④朱子学を尊んだが陸王学にも「異中の同」を認めた。江戸期に朱子学と陸王学の両方が繁栄した開始点に惺窩がいた。

#### ⑤惺窩と弟子の林羅山はどうして仏教を否定して朱子学を讃えたのか。朱子学の何が仏教より優れていると言ったのか。

#### ⑥惺窩は人類普遍的な理に従うことを正義とする国際派であり、日本の王朝文化を讃える者で単なる日本下げ論者ではない。

## 藤原惺窩(1561[永禄四]-1619[元和五])



- 冷泉家の所領、播磨国で産まれる。名は肅で惺窩は号。苗字は冷泉家であるが、儒者として中国・朝鮮の習俗に従い氏族の姓を取って藤原惺窩と称される。藤原定家の末裔である。幼少から播磨国の禅寺に入ったが、三木城合戦で父と兄が別所氏に討ち取られる。
- 十九歳で相国寺に入り禅と儒学を学ぶ。詩文の才で大名界に名が知られるようになり、文禄の役で明の講和使節と詩文を交換する外交僧として肥前名護屋城に赴く。この時代、五山をはじめとした禅僧(臨濟僧)は漢文の能力を持つ学者であり、国内の法度や外交文書の作成、あるいは明・朝鮮の使節との交渉役として時の政権に仕えていた。太原雪斎(今川義元の政治顧問)、西笑承兌(惺窩と同じ相国寺の住職で、秀吉の外交顧問)、三要元佑(岩倉円通寺、家康の外交顧問)、金持院崇伝(南禅寺、同)、文之玄昌(東福寺ほか、島津氏の外交顧問)がその代表。
- 名護屋で徳川家康と知り合い、以降家康との縁が続く。家康に乞われて江戸に下り、『貞観政要』の講義を行う。
- 中国の文治主義に強く憧れ日本の武家支配を蔑み、秀吉・家康ともに武力をもって問題を解決する姿勢に批判的であり続けた。明で勉強することを望み、石田三成の命を受けて薩摩国に下った後に渡海を試みたが、ついに果たせなかった。『惺窩先生行状』によれば、惺窩は鬼海島(現在の鹿児島県硫黄島)に漂着して終えた、とある。ただし林羅山の筆であり、実際は何らかの理由で引き返したと思われる。当時の鬼海島は火薬の原料である硫黄の産地であり、薩摩~琉球~明の(密)貿易ルートの重要な経由地であった。硫黄は日本の特産品で外国産の硝石・鉛と並ぶ戦争の必需品であった。
- 慶長の役で日本に俘虜となった李朝の文官、姜沆(カン・ハン)と親しく交流して朱子学の知識を吸収し、朝鮮人の手によって日本初の四書の活版印刷を勅命出版した(1599)。当時の朝廷では、易姓革命を認める『孟子』は天皇への受講が禁じられていた。勅命で『孟子』の出版に成功したことは、王朝伝統の儒学に対する朱子学の勝利といえる。
- 関ヶ原の戦では西軍に門人で但馬竹田城主赤松広通、対明外交の仕事を通じて旧知の間柄であった石田三成がいたが、これに加担しなかった。戦後の直後には西軍の武将に近しかったにもかかわらず、家康から伏見城に招かれ講義を乞われた。惺窩は家康に、『漢書』と呂東萊『十七史』を講義した。家康から仕える誘いを受けたが、天皇がいる京都を文治の都として武府の江戸には赴かなかった。代わりに、彼の気鋭の弟子である林羅山を推薦した。大名の赤松広通の庇護を失った惺窩は困窮して、門人たちの支援で妻子を養っていた。
- 政権と癒着して浮薄となった相国寺から離れて還俗する。以後は、京都で一文化人として活動する。惺窩は漢詩から和歌までを行ったが、後世に果たした役割としては臨濟宗の学問の一部であった儒学を独立させたところにある。室町時代前期の臨濟僧である岐陽方秀(1424没)は、日本で四書集注に最初の訓点をほどこした。岐陽は「禅儒不二」を唱えて、朱子学を禅の教義と調和させて読んだ。惺窩はこの岐陽以来の禅儒不二を終わらせて、個人の救済でしかない禅を斥けて個人と社会を包む倫理である朱子学を選択した。
- 朱子学を漢儒の停滞を破る学として称揚し普及に努めたが、陸王学にも理解を示し、晩年には陽明学派で三教合一論者の林兆恩(明末)の説に傾倒した。自らは仏教から遠ざかったが、民衆には必要であるとして容認する姿勢であった。若き林羅山が彼の思想的不徹底を批判して陸王学の排斥を意見したとき、惺窩は「君は異を見て同を見ない」と諫める返事をした。羅山は惺窩に入門してその寵愛を受け、羅山の朱子学は惺窩の影響なのか、陸王学に妥協した見解が述べられている。ただ石田一良氏によれば、惺窩の死後の羅山は明確に朱子学本来の客観的な理を強調する純化の方向に向かっていった。
- 日本の王朝時代もまた、中華に並び立つ文化の絶頂期であったと称えた。公家の中院通勝は源氏物語研究の権威であったが、親しく付き合った。源氏物語を乱倫の書として糾弾する後世の道学者たちの姿勢から、彼じしんは遠かった。
- 京都における彼の信奉者のサークルは、京学と呼ばれる。その中には、三河武士から脱藩して京都一乗寺に詩仙堂を営んだ文人の石川丈山がいる。吉田(角倉)素庵は、朱印船貿易を営む門人であった。惺窩は素庵から『船中規約』の起草を乞われて、国の風俗言語の異を越えた天賦の理を基準とせよ、と諭した。惺窩に学んだ松永尺五はその門人に木下順庵があり、順庵門下の「木門十哲」からは新井白石・室鳩巢の両儒が輩出して、彼らは三代の将軍(家宣・家継・吉宗)で相次いでブレインとなった。

## I 日本朱子学のはじまり

理の在るや天の幬（おほ）はざる無きが如く、地の載せざる無きに似たり。此の邦亦然り。朝鮮亦然り。安南亦然り。中国亦然り。東海の東、西海の西、此の言合ひ此の理同じ也。南北亦然かの若し。是れ豈至公至大至正至明に非ずや。若し之を私する者有らば我信ぜざる也。

（藤原惺窩の言。林羅山『惺窩答問』より）

「徳川の平和」は、政治面では家康の卓抜な政治的叡智の賜であるが、思想面では藤原惺窩の寄与が大である。両者は、政治思想においては一見対立的であるが、儒教理念による「太平を致す」『貞観政要』の精神においては深い所で一致している。桃山時代は、前代の政治と思想の対立抗争を一方で排除、一方で止揚しようとする時代であった。

（上垣外憲一『惺窩と家康の「日本の大航海時代」』講談社選書メチエ）

惺窩は、日本の体制を最も憎んでいた。日本は古来、力の競争によってできあがっている社会で、武将が大名という統治者になり、そのもっとも強勢な者が天下をとる。秀吉が朝鮮にいる。惺窩ほど日本体制を憎み、秀吉を憎んだ男もない。惺窩は、姜沆に言った、「・・・(朝鮮と明の)軍隊が日本に上陸すれば日本語で”決して民を殺さない。財物を奪わない”とゆくさきぎきに高札をかかげて秋毫も犯すことがなければ、民はこれをよろこび、さからうことなく、軍隊はそのまま白河の関までらくらくと平定することができる・・・」さらに姜沆は、中国・朝鮮の科挙の制度について惺窩に語ってきかせた。惺窩は感激した。

（司馬遼太郎『街道をゆく 韓のくに紀行』朝日文庫）

- 惺窩は戦国が終了した安土桃山時代、武力を用いず設計された平和な統治思想を儒学に求め、儒学に人類普遍的な理想的統治思想を見出した。正しい思想を外国に求めるのは、惺窩のみならず日本思想家の典型であるといえるだろう。
- 当時のカトリック宣教師が伝えたルネサンス・宗教改革期の西洋思想は科学技術においては優れていたが、いまだ平和な社会の統治思想を編み出すことができていなかった点を留意しなければなるまい。惺窩も弟子の林羅山も、当時入手可能なカトリック関連の書籍はかなり読んでいたと思われる。



# I 日本朱子学のはじまり

1560 桶狭間の戦い      1600 関ヶ原の戦い      1615 大坂夏の陣      1635 寛永武家諸法度 (林羅山起草)      1683 天和武家諸法度 (徳川綱吉発布)

1561      藤原惺窩      1619

1583      林羅山      1657

1597 建仁寺を下山    1603 惺窩に入門    1605 家康と初会見    1614 方広寺事件    1624 家光の侍講となる    1630 上野に孔子廟を建立



石川丈山碑(一乗寺)

1618      林鷲峰      1680      →林家

1619      山崎闇斎      1682

1655 堀川で闇斎塾を開く

1627      伊藤仁斎      1705

1662 堀川で古義堂を開く

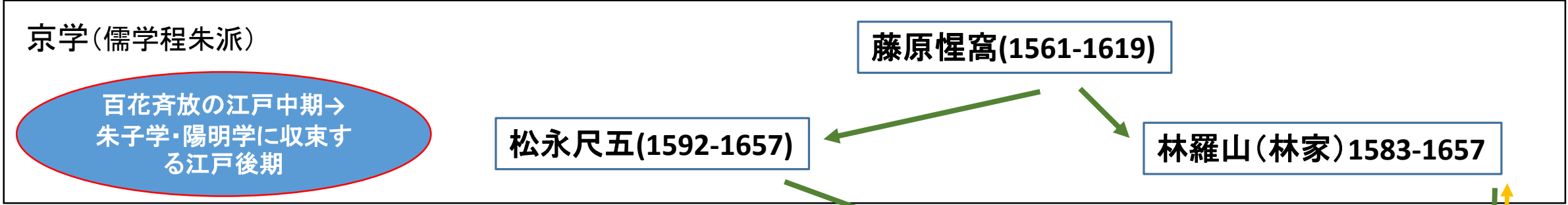
師弟

親子

惺窩の後継者たちの京学が京都と江戸で活動。惺窩の没後京都を中心に独自で朱子学を学ぶ者が現れる。

土佐吸江寺で南学を学ぶ

京都の商家で独学



土佐南学 谷時中

土佐独自の朱子学  
実践重視

九州 雨森芳洲

貝原益軒

京都で当時の  
儒者と交流

佐藤直方・浅見綱斎・三宅尚斎

朱子学は道統を体認して実践する学あるのみであり、それ以外は不純不要である

朱子学の概念装置を批判、  
日用の人間関係の中に倫理を見いだすべし

仁斎学は日常のあいさつを  
倫理だなどと言っているだけ  
である

木下順庵(1621-1699)

木門十哲

新井白石・  
室鳩巢・  
三宅観瀾

山鹿素行

羅山に師事  
死後に朱子学  
批判に移る

京都 江戸

古代の聖人の学は  
民を安んずる礼楽  
刑政の制定発布の  
みであり、道德倫  
理ではない

古文辞学

荻生徂徠

徂徠学は倫理をないがしろに  
して文芸博学に感嘆している  
儒学として許容しがたい

朱子学は古代思想を全く  
誤解している

土佐南学派・崎門学

山崎闇斎(1619-1682)

古義学

伊藤仁斎(1627-1705)

中村惕斎(1629-1702)

大坂 懐徳堂

徂徠学批判・朱子学反撃の先鞭

柴野栗山  
尾藤二洲  
古賀精里  
佐藤一斎

昌平黌

→ 師弟関係

↔ 対立・批判関係



### 丸山眞男『日本政治思想史研究』1952

徳川政権に適合的な朱子学の「理」が解体していく過程が、江戸思想史である。

林羅山: 封建的ヒエラルヒーを「自然的秩序」(=理)として承認する

仁斎・徂徠: 「理」「性」と「道」を分離して、朱子学的思惟を解体する



### 尾藤正英『日本封建思想史研究—幕藩体制の原理と朱子学的思惟』1961

松平定信の寛政の改革(寛政異学の禁)以前に朱子学が官学化されたことは無かった。

家康の林羅山に対する扱いは禅僧の承兌・元信と変わらず、寺社行政、外交文書の解読と作成、法案の起草を期待したにすぎない。

朱子学のみならず、統治に資するほどの教化力を儒教は江戸時代の長い期間持たなかった。幕府と各藩に朱子学が普及したのは江戸時代後期のことである。

- 西村天囚のテーゼ「家康が儒学を尊び羅山を儒臣としたことに諸侯がならい、江戸時代開創の一七世紀は朱子学の興隆時代となった」は、津田左右吉の批判以降否定されるに至った。しかし江戸時代初頭、朱子学は日本の少なくとも知識人にとって斬新かつ有効な政治思想の体系として写っていたことは間違いないのではないか。



### 林家(江戸時代前期)

幕府の文書官僚として禄を与えられ、  
将軍に儒学を進講する



### 《朱子学の役割》

将軍、大名の教養  
儒学者の興味  
(の範囲を出ない)



### 吉宗時代(江戸時代中期)

- 室鳩巢『六諭衍義大意』を三都の寺子屋に配布  
(朱子学の庶民版、教育勅語のモデル)
- 石田梅岩の心学が影響を広める



被統治階級への  
道徳啓蒙の一手段  
(神・仏と混交並行)



### 松平定信時代(江戸時代後期)

- 朱子学を官学と定めて昌平黌を幕府の学校とする
- 各藩で藩校が設立、朱子学が教えられる



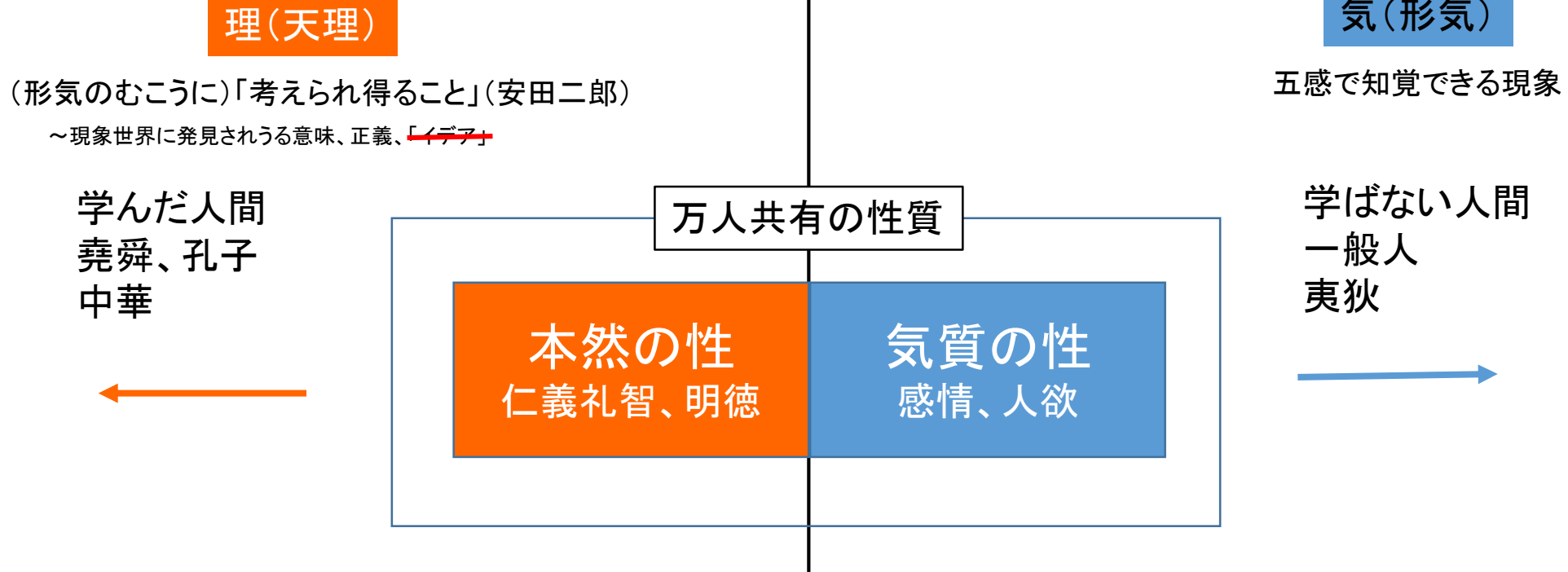
統治階級への義務の教育  
文武の教育熱が各階層・各  
国各藩で過熱する  
朱子学の教養化



明治国家の成立へ  
儒学原理が国家制度に昇格



# I 日本朱子学のはじまり



- 朱子学は秩序が「理」であって、人間はその尊さを自覚して実践するべきと説く。(林家が強調する面)
- しかし朱子学は、人間はすべて「**本然の性**」と「**氣質の性**」を持って生まれ、すべての人間は「本然の性」により「氣質の性」を制御できるしなおかつしなければならず(明明徳)、目覚めた者はより多くの人を「本然の性」に目覚めさせる義務があり(新民)、**不断の努力で善を求め続けなければならない**という(止至善)。朱子学は、**人間の義務**と**人間の可能性**の両方を説く思想であり、(古い儒教の受身の民ではなく)主体性をもって社会に義務を果たす士大夫の出現を期待する思想である。

## I 日本朱子学のはじまり



江戸時代の末期になると、農民や足軽(卒)の子弟も武士に倣って文と武を熱心に学ぶ機運が広がっていた。この状況はおそらく徳川家康が想定していた身分秩序ではなかったであろう。しかし朱子学の理想としては正しいことであった。

『大学』という古典は、**国民全員**に道德の頂点＝国政の頂点に立つ**権利**を与え、同時に**国民全員**に公共のために尽くす**義務**を持たせる理想を語った書として読むことができる。東アジア的近代国家のひな型は、すでに古典に用意されていた。宋代士大夫の理想→明治国家の暗黙の設計図

—多くの西洋近代主義者も元田永孚(注:もとだながざね。教育勅語の起草者)も、日本を統合的で強力な中央集権国家につくり変えようとした点では同じであった。(小倉紀蔵)

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラシ

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽



朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

道統の存在 日本には古今不変の理が継承されている

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラシ

道統の内容 各人は主体的に心を尽くして天理に従うよう努力せよ

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

道統継承の誓い

道統は諸外国にも通じる原理である

明治二十三年十月三十日

御名御璽